

仏本行集経の編纂と Lalitavistara

岡 野 潔

仏本行集経 (abbr. 仏) の末尾にあげられた五仏伝の名に Lalitavistara (L) にあたる名はない。薩婆多師の『大莊嚴』は L の漢訳たる方広大莊嚴経 (方) に訳名が似るが、両者は異なる仏伝である。なぜなら、仏 701 b7-10 に「薩婆多師復作是言」として述べられているのは馬鳴の Buddhacarita (Bc) II. 18 詩節にあたる文である(!) が、その直前に「或有師言」として述べられているのは L 98.6-9 の引用なのである。このことから、薩婆多師の『大莊嚴』——これは Bc を散文に書きなおした仏伝の 1 つではなかったか——と L とは別であることがわかる。こうして五部派の仏伝の中に L の名を見出すことはできないが、それは L が大乘經典であつて部派所属の外にあったためであろう。L を引用した際に、部派の名をあげず「師」としか言っていないのはそのためであろう。名はないが実際に仏の編纂に L がかなり利用されたことが、仏をその素材に解体してみる作業で明らかになってくる。仏と L、及び仏と L の異本たる方や普曜経 (普) との逐字的な一致は 66 箇所見出される (以下 L は Lefmann 本を用い、仏等は 大正蔵を用いて、頁・段・行の数字で示す):

1 679a13-b25=23.10-24.21; 2 679b26-c22=25.5-22 [1 と 2 は連続する]; 3 680b20-c24=29.14-30.19; 4 680c25-682b6=31.8-36.4; 5 691b5-c23=98.13-99.16; 6 701b2-6=98.6-9 [師有り、という引用として]; 7 701c1-20=100.8-19; (8 A 702 b11-c14=121.1-122.2), 8 B 702c14-703a4=122.2-123.12; 9 703b16-704a15=124.9-126.18; 10 704a16-c13=127.3-128.8; 11 706a21-707a17=129.12-132.22 [L 130.1-5 にあたる部分は普と仏の両方になし; 仏 707a5-17 にあたる方なし]; 12 707b17-c3=136.10-137.8; 13 707c4-708a9=141.8-142.19; 14 708b19-709a6=142.20-144.9 [13 と 14 は本来連続していた]; 15 709a6-710b13=145.14-150.22; 16 710b23-c28=153.21-155.6 [L 155.6-13 は省略された?]; 17 710c29-711a4=155.14-19; 18 711c14-712a19=152.8-153.14; 19 712a27-b27=144.10-145.7 [19 は 14 と 15 の間からもってこられたのか、別の仏伝を利用したのか不明]; 20 716c19-717c4=175.17-179.4 [717b10-c4 (=L 178.3-179.4) にあたる方なし]; 21 717c6-718b2=173.11-175.14; 22 718b3-719c8=170.7-173.8 [718b3-10 (=L 170.7-14) にあたる方なし] [20 から

2 2 は連続する] ; 2 3 721a7-b3=方 571a28-b12=L 普なし ;
 2 4 721c5-722a6=方 571b17-c10=L 普なし ; 2 5 725c14-26=
 200.20-201.10 ; 2 6 727b12-728b9=方 571c16-572a21= 普 L なし
 (cf. 194.7-197.20) ; 2 7 729a13-b3=207.2-208.5 ; 2 8 729b28-
 c2=209.12-15 ; 2 9 729c4-730a1=217.16=218.18 [2 8 と 2 9 は
 方でのみ連続している] ; 3 0 739c11-29=227.5-19=方なし (cf.
 576a7) ; 3 1 740a4-24=方 577a29-b11=L 普なし ; 3 2 740b1-29
 =方 577b11-c1=L 普なし [3 1 と 3 2 は連続する] ; 3 3 743b10
 -744a14=方 578a13-b14=L 普なし ; 3 4 764c7-765a22=246.6-
 247.22 ; 3 5 766b22-767a2=581b2-20 (cf. L 251.6-252.4) ; 3 6
 769b3-770a8=260.17-263.20 ; 3 7 772b22-c29=272.8-273.8 ;
 3 8 773a1-23=方 587a20-b5 (=cf. L 275.17-276.9) ; 3 9 773a
 23-b16=286.9-287.1 (773a23-b18=方 587b5-15) ; 4 0 774b21-c21
 =284.11-285.16 [774b29-c4が L より余分] ; 4 1 774c22-
 776a29=299.19-305.3 [仏 776a11-29にあたる方なし] ; 4 2
 776c17-777a20=305.4-306.9=普方なし [魔物の描写が L では
 307.13まで続いているにもかかわらず仏では 306.9までしかない
] ; 4 3 779b15-781a20=308.15-316.18 [L 309.9-13 ; 310.1
 -5 ; 312.9-11 ; 313.15-314.5 (すべて韻文) は普と仏に共通して
 欠ける] ; 4 4 781a21-22=普 519a11-12=L 方なし ; 4 5 781a
 23-29=319.17-22 [4 3 から 4 5 は普では連続する] ; 4 6 781
 c9-783c20=321.6-329.18 [L 326.1-329.14にあたる方なし] ;
 4 7 783c21-784a2=方 593a18-26=L 普なし ; 4 8 784a3-9=329.
 19-330.4 ; 4 9 784a10-b2=330.10-331.19=方なし [4 5 から
 4 9 は連続する] ; 5 0 784b13-16=336.11-15=方なし ; 5 1
 784b17-20=普 520c27-29=L 方なし ; 5 2 784b21-28=336.1-10=
 方なし [この 5 2 は L も 普 も 5 0 の前にある] ; 5 3 785b15-
 21=338.11-19=方なし [5 3 は 5 8 と 5 9 の間から移された] ;
 5 4 788c5-22=方 594b23-c8=Bc. XIII, 60-67 (!)=L 普なし ; 5 5
 788c26-790a12=331.20-335.10=方なし (省略された?) ;
 5 6 790a12-24 (散文) =335.10-20 (韻文) [5 5 と 5 6 は
 連続する] ; 5 7 790a24-b2 (散文) =337.7-15 (韻文) =方な
 し ; 5 8 790b6-14=337.16-338.6=方なし, 790b15-16=338.7-
 10(?)=方なし ; 5 9 790b17-c6=338.20-340.6=方なし [5 7 と
 5 8 と 5 3 と 5 9 は本来連続している] ; 6 0 791a8-20=318.
 7-19 [L と順序が違っているが、こちらの位置が古い形である]
 ; 6 1 791c7-792a4=340.9-342.8=普方なし ; 6 2 792a4-6=307.
 18-19(?)=普方なし ; 6 3 792a7-15=308.7-14=普方なし [6 1 から
 6 3 は韻文として連続] ; 6 4 794c12-795b11=346.5-348.18 ;
 (6 5 A 801a13-b19=381.3-382.17) , 6 5 B 801b29-802a27=
 382.18-385.7 [6 5 B の部分のみ仏と L と 普 の三者が合致する]
 [L 383.12-17の韻文の部分が仏と方と普では散文である] ;
 6 6 806a24-c6=398.16-399.20 [仏はかなり増広]

以上 66 箇所が仏の L 断片なのであるが、この闍那崛多が用いた L は、L の系統のどこに位置するのであろうか。分岐した系統の横幅と歴史的な流れを、横軸と縦軸として 1 つの座標にあらわすならば、梵文 L と方の違いは横軸の幅の広さを、普は縦軸上の始点をあらわすであろう。この座標上に 66 の断片を置き、普・L・方それぞれへの近さを測ることにより、闍那崛多の用いた L の相対的な位置を決定しうるはずである。

(1) 普への近さ 11・43・44・〈43から45の連続性〉・51に普のみに近い特徴を見ることができる。11は遊戲觀囑品、43から51は魔怖菩薩品である。また L と方より古い特徴は〈20から22 (空声勸厭品) の順序〉・42・〈60の位置〉に指摘しうる。

(2) L への近さ 6 (?)・41・49・50・52・53・55・56・57・58 は方より普と L に近く、とりわけ L のみに近い特徴は、20・22・30・42・46・59・60・61・62・63に見られる。55から58は魔怖菩薩品、20と22は空声勸厭品、59から63は菩薩降魔品である。これらの諸品は L に近いといえよう。

(3) 方への近さ 方のみに近い特徴は23・24・26・28・29・31・32・33・35・38・39・47・54に見られ、65B も L より普と方に近い。23と24は淨飯王夢品、26は耶輸陀羅夢品、28と29は捨宮出家品、31から33は車匿等還品、38と39は向菩提樹品である。これらの諸品は連続して方に近いといえよう。しかしここで以下に述べる問題点がある。

(4) 仏と方の一致における問題 方には、普の古いかたちを捨てて新たに書き改めた、大規模な改変が特に感夢品・出家品・降魔品において見られる。いま「方に近い」としてあげた、仏と方のみが一致する部分は、感夢品・出家品を中心とした方の改変部分にはかならない。この改変部分における両者の一致は単に方の改変を仏がコピーすることによって起こったのだろうか。この一致はむしろ、仏が利用したのは別の仏伝であって、その仏伝が方にも影響を与え、改変をもたらしただめ起こったのではないかと私は思う。その仏伝とは何か。〈Bc 系の発達仏伝〉であったと考える。以下説明しよう。

方の出家品における改変は、Bc への類似性が特徴的である。また方の降魔品の改変においては Bc XIII. 60-67 の 8 偈が入り込んでいる (54 を見よ)。方の改変部分における Bc との親近性は疑いえず、方の改変において影響を与えた未知の資料は、Bc とかかわりの深いものであったと推測される。一方、仏の第十九路逢死屍品から第二十六問阿羅邏品を見ると、それらの品で闍那崛多が用いた仏伝は、Bc の偈頌を核にしてそれらを散文に書きかえることにより成立したものであることがわかる。未知の〈Bc 系の発達仏伝〉が、L と平行して存在していたのである。方に見出された Bc の同じ 8 偈が、仏にも

見出されることは偶然ではあるまい。このことは、方が改変においてその8偈を Bc から直接取ったのではなく、仏が利用した Bc とかかわりの深い文献を同じく方も利用したことによって、結果的に Bc の同じ偈が方にも入り込んでしまったことを証拠だてていると思われる。(5) 位置づけの困難さ さて私は用いられた66の部分について、普と梵本 L との近さを指摘する一方、方との近さについては別のソースを用いた一致でありうると疑問視した。私は用いられた L は普より後で L と方が成立・分岐する前に位置づけられるのではないかと思う。しかし 5・10(?)・18・19・33・40・66 は L や方より後の特徴をもつ。35 は方より新しい。これらを見捨てることはできない。いったい疑いなく L と同一系統でしかも現 L よりはるかに増広加筆されている箇所が仏に見つかるのだが(5・19・66 など)、これらは闍那崛多の用いた L にあったものなのか、それとも用いた資料に L 系統でより発達した〈L に近似した仏伝〉があり、そちらに属していたのか判断に苦しむ。そのような仏伝の存在は、仏 678a1-c16 等から、十分疑いうるからである。私は〈L に近似した仏伝〉の可能性を考慮に入れて、L と逐字的に一致するものと一致にやや疑いが残るものを厳密に分かとうとしたが、問題はそれほど簡単ではないのに気づいた。A の部分が全く一致し、B の部分がかなり違っていて、しかも A と B が内容的にも形式的にもつながっている場合、A だけが全く一致するからといって、A から B を切り離してしまうのはおかしいであろう。この例としては 8A と 8B、9 と 10、65A と 65B があげられる。さらに深刻なのは、上で私はばらばらに L との一致箇所をあげたが、闍那崛多は決してこれほどばらばらに L を、部分に切って用いたわけではないであろう。彼は「ひとかたまり」として L を利用しているのに、われわれはそのひとかたまりとして借用された部分に、われわれの知る L との一致と後にできた部分の不一致とを同時に見出してしまう、両者を切り分けて、後にできた部分を「異質なもの」として排除してしまったために、これほど L との一致箇所がばらばらになってしまった可能性がある。すると一致部分と一致部分の間にはさまった L と異なる部分をどれだけ容認するかという問題が起こってくる。例えば 17 と 18 の間の部分も L であったと見なすなら、その L は現 L や方より後に位置すると、結論せざるを得ないであろう。

〈キーワード〉『仏本行集經』, Lalitavistara, Buddhacarita

(東北大学大学院)